



ある晩、私は映画を見た。映画の主人公は、子供好きの、花や小鳥や音楽を愛する、恋多き女である。彼女はその政治的信条を貫いて妥協せず、勇敢に戦って、遂に暗殺される。私は一般に英雄主義というものを好まないが、その映画をみては、心きこまれて、「一喜一憂が暗殺を待たした。すると「口

夕陽妄語

加藤周一

日新 (S62) 9.17

自発性 ということ

Freiheit ist immer nur Freiheit des anders Denkenden.
(ほんとうの) 自由は、いつでも、ただ、別な風に考える人間の自由だけである——
ローザ・ルクセンブルク「ロシア革命」



「ローザ・ルクセンブルク」の一場面。

別な風に考える自由

甦る女性革命家の意思

「型戦」が始まり、東洋の平和のために言論の自由が採られたから、もはや「口」と「カルル」などという者はなくなった。それにもかかわらぬ、一九〇〇年代に、「ローザ」は再び甦る。たゞはザイ・ンでは、彼女の政治論文・演説集が刊行され (Politische Schriften, 3 vols. Edition, 1966-1970)、ドイツの時期から激しく対立したカウツキーも、最後に批判した「二冊」の「一冊」に収められた論文集 (Schriften) の表面からは、ほとんど消えてしまった。西ドイツでも、そこには少文化の持統性があるが、同じ見の多様な条件を必要とするというものであった。要するにレーニン・トロツキの党は、大衆を指導して政権をとるべきであったが、政権をとった後では直ちに大衆の自発性をよって支えられるべきだ、という議論である。「政府の支持者だけの自由、党員だけの自由、それがどれほど多数の自由であっても、自由ではない。(ほんとうの) 自由は、いつでも、別な風に考える人間

ところが、その映画は奇妙に長く、記憶のどこに残って容易に消えない。何故だろうか。理由は、おそろしく映画をつきぬけて、その先にあるだろう、と私は考える。一人の女主人公が、人間の女らしく——そういうことはよくある——英雄的にその信念を貫く——それも映画のなかではよくある——からではなくて、その主人公がローザ・ルクセンブルクだったからにちがいない。

ローザ・ルクセンブルクとは誰か。殺しても、消しても、誰かまがざる者である。ポーランドで生まれた (一八七〇年、ただし七一年説もある) ユダヤ人で、女で、平和主義者で、戦間的な社会主義者で、しかも十月革命後のレーニンの政策の鋭い批判者であった。これ

「一冊」は「ローザとカルル」と書いたとき、彼の読者がそれだけで何を意味するかを十分に理解するたつと、と考えていたにちがいない。

「一冊」は「ローザとカルル」と書いたとき、彼の読者がそれだけで何を意味するかを十分に理解するたつと、と考えていたにちがいない。

「一冊」は「ローザとカルル」と書いたとき、彼の読者がそれだけで何を意味するかを十分に理解するたつと、と考えていたにちがいない。

その最中、周知の如く、米英軍が中国に「進出」し、米英

権の抱かれた内外の具体的な状況の問題がある。また政治的領域に於ける極端な理想主義の一般的問題もあるはずだ。たしかに「ローザ」の方針は、ポランドでも失敗した。他方、一九一八年末一九一九年は、「スターリニズム」が、全く偶然にはなく、生みだされた。しかし昔の政策論争に決着をこけるために、「ローザ」が何度も甦って来るわけではない。彼女が甦って来るのは、彼女自身の言葉によれば大衆の「自発性」という概念が、今世紀の社会の現実を含む基本的な問題をよびよらし、深くそれに係るからではないだろうか。組織と個人、社会秩序と少数集団の権利、また殊に大衆操作と操作に抵抗してあらわれる自発的な大衆の意思。「ローザ」が彼女の文脈のなかで力説したことは、われわれと関係がないだろうか。しかし「政府の支持者だけの自由」「政府」は、社会主義政府だけに限った話ではあるまい。「別な風に考える人間の自由」は今日われわれの住む世界の問題そのものではないだろうか。ローザ・ルクセンブルクは、われわれの問題への解答ではないが、問題の鋭い意識化の象徴である。故にフォン・トゥロツキ氏は、すべてにもかかわらず、映画を作ったのである。「ローザ」は甦ることをめざしているのである。(評論家)